

令和6年度病害虫発生予察予報第9号（令和6年12月）

令和6年12月6日
高知県病害虫防除所

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量※
促成キュウリ	べと病 菌核病 うどんこ病 黄化えそ病 退緑黄化病 ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ ハスモンヨトウ	平年並(中央、中西)、少(西) <u>多(中央、西)</u> 、やや少(中西) 平年並(中西、西)、少(中央) <u>多(中西、西)</u> 、やや少(中央) <u>多(西)</u> 、 <u>やや多(中央、中西)</u> やや少(中西)、少(中央、西) <u>やや多(中央、西)</u> 、やや少(中西) <u>やや多(県下全域)</u>
促成ナス	うどんこ病 灰色かび病 黒枯病 すすかび病 ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ ハスモンヨトウ	<u>多(中央)</u> 、やや少(東)、少(西) <u>多(東)</u> 、平年並(中央、西) <u>多(西)</u> 、やや少(東)、少(中央) <u>多(西)</u> 、 <u>やや多(中央)</u> 、少(東) 少(県下全域) <u>やや多(中央、西)</u> 、やや少(東) <u>やや多(県下全域)</u>
促成ピーマン ・シシトウ	うどんこ病 斑点病 黒枯病 ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ ハスモンヨトウ	やや少(東)、少(中央、中西) <u>多(中央)</u> 、 <u>やや多(中西)</u> 、平年並(東) <u>多(中央)</u> 、 <u>やや多(中西)</u> 、少(東) やや少(中央、中西)、少(東) <u>やや多(中西)</u> 、やや少(東、中央) <u>やや多(東、中央)</u> 、少(中西)
促成トマト	黄化葉巻病 タバココナジラミ ハスモンヨトウ	<u>多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u>

※ ()内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部
 県東部：安芸市、室戸市および安芸郡の町村
 県中央部：高知市、南国市、香美市、香南市、長岡郡・土佐郡の町村、
 吾川郡いの町および高岡郡日高村
 県中西部：土佐市、須崎市、高岡郡(日高村を除く)町村および吾川郡仁淀川町
 県西部：四万十市、宿毛市、土佐清水市および幡多郡の町村
 なお、野菜は「土佐市」を中央部に入れています。

I 気象予報(高松地方気象台12月5日発表)

12月7日から1月6日までの天候見通し

<予想される向こう1か月の天候>

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けやすいため低いでしょう。低気圧の影響を受けにくいいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温は、低い確率60%です。降水量は、少ない確率50%です。日照時間は、多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は低い確率50%です。2週目は低い確率60%です。3～4週目は平年並または低い確率ともに40%です

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)	
1か月	四国地方	気温	60			30	10
		降水量	50			30	20
		日照時間	20	30	50		

<気温経過の各階級の確率(%)>

期間	対象地域	低い	平年並	高い
1週目	四国地方	50	30	20
2週目		60	30	10
3～4週目		40	40	20

<予報の対象期間>

1か月：12月 7日(土)～ 1月 6日(月)

1週目：12月 7日(土)～12月13日(金)

2週目：12月14日(土)～12月20日(金)

3～4週目：12月21日(土)～ 1月 3日(金)

II 病虫害発生予想

1 促成キュウリの病虫害

1) べと病

予 想 発生量：平年並(中央部、中西部)、少(西部)

根 拠

(1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部、中西部で平年並、西部で平年よりも少なかった。発病程度は中央部で平年よりも高く、中西部、西部では平年以下であった。

(2) 本病は20℃前後、多湿条件下で発病が多くなる。12月の降水量は少ないと予想されていることから、現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温によるハウス内湿度の低下に努める。

2) 菌核病

予 想 発生量：多(中央部、西部)、やや少(中西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県中央部、西部で発生が見られ、両地域とも発生面積は平年よりも多く、発病程度は平年並であった。
- (2) 本病は12～2月に多発する傾向が見られるため、発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 発病果実や茎葉は菌核を形成する前に除去し、次作の伝染源を少なくするとともに、換気や加温によるハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病履歴のあるほ場では、7日間隔で数回予防散布を行う。

3) うどんこ病

予 想 発生量：平年並(中西部、西部)、少(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中西部、西部で平年並、中央部で少なかった。発病程度はいずれの地域も平年以下であった。
- (2) 気温の低下にともない病勢の進展は緩慢となることから、発生の増加は少なく、現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 他の糸状菌病害とは異なり、やや乾燥条件で発生が多くなる。多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。薬剤によっては、散布後も病斑の見え方が変化せず防除効果がわかりづらい場合があるため、防除後に展開した葉の発病の有無で防除効果を判断する。

4) 黄化えそ病

予 想 発生量：多(中西部、西部)、やや少(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、中西部でやや多く、中央部で少なかった。発生程度は西部で平年よりもやや高く、中西部で平年並、中央部では低かった。
- (2) 11月上中旬の気温が平年よりも高く推移したことから、野外からの媒介虫の飛び込みが例年よりも遅くまで続いたと考えられ、12月に入っても既感染株の発病が続くと予想される。

対 策

- (1) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。また、罹病株は早期に除去し、埋却するなどの処分を行う。

5) 退緑黄化病

予 想 発生量：多(西部)、やや多(中央部、中西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、

中央部、中西部で平年並であった。発生程度は西部で平年よりも高く、中央部、中西部では平年並であった。

- (2) 11月上中旬の気温が平年よりも高く推移したことから、野外からの媒介虫の飛び込みが例年よりも遅くまで続いたと考えられ、12月に入っても既感染株の発病が続くと予想される。

対 策

- (1) 媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。

6) ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量：やや少(中西部)、少(中央部、西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県中央部と中西部で発生が見られ、発生面積は中西部で平年並、中央部で平年よりも少なかった。発生程度は中西部で平年並、中央部で平年よりも低かった。

- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、野外から施設内への飛び込みも少なくなるので、減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるため、低密度時の防除を徹底する。薬剤防除は上位葉を中心に実施する。また、薬剤抵抗性が発達しているため、天敵の利用など、化学合成農薬以外の防除方法も取り入れる。

7) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多(中央部、西部)、やや少(中西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部と西部で平年よりも多く、中西部では平年並であった。発生程度は中央部と西部で平年よりも高く、中西部ではやや高かった。

- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、野外から施設内への飛び込みも少なくなるので、減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。また、薬剤抵抗性が発達しているため、天敵の利用など、化学合成農薬以外の防除方法も取り入れる。

8) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多(県下全域)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生がみられた。発生面積はいずれの地域も平年よりも多く、発生程度は中央部で平年よりも高く、中西部、西部で平年並であった。

- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月第1半旬～第6半旬の誘殺数は、全地点で平年を上回っているが、例年、気温の低下とともに野外密度も低下することから、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

2 促成ナスの病害虫

1) うどんこ病

予 想 発生量：多(中央部)、やや少(東部)、少(西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県東部と中央部で発生が見られた。発生面積は中央部で平年よりも多く、東部でやや少なかった。発病程度は両地域とも平年より低かった。
- (2) 気温の低下にともない病勢の進展が緩慢となることから、発生の増加は少なく、現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 他の糸状菌病害とは異なり、やや乾燥条件で発病が多くなる。多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。

2) 灰色かび病

予 想 発生量：多(東部)、平年並(中央部、西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は東部で平年よりも多く、中央部、西部で平年並であった。発病程度は東部で平年よりも高く、中央部、西部では平年並であった。
- (2) 12月の気温は平年よりも低く、降水量は少ないと予想されており、加温機の稼働によりハウス内湿度が低下することから、現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底するとともに、換気によりハウス内湿度の低下に努める。

3) 黒枯病

予 想 発生量：多(西部)、やや少(東部)、少(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、東部でやや少なく、中央部で少なかった。発病程度は西部で平年よりも高く、東部、中央部では平年以下であった。
- (2) 気温の低下にともない病勢の進展が緩慢となることから、発生の増加は少なく、現在の現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温により、ハウス内湿度の低下に努める。

(2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

4) すすかび病

予 想 発生量：多(西部)、やや多(中央部)、少(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県中央部、西部で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、中央部でやや多かった。発病程度は西部で平年よりも高く、中央部では平年並であった。
- (2) 気温の低下にともない病勢の進展が緩慢となることから、発生の増加は少なく、現在の現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温により、ハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

5) ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量：少(県下全域)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県東部と中央部で発生が見られた。発生面積は中央部で平年よりもやや少なく、東部で少なかった。発生程度は両地域ともに平年よりも低かった。
- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、ほとんどのほ場でタバコカスミカメ等の天敵が定着していることから、減少傾向で推移するものと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるため、低密度時の防除を徹底する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

6) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多(中央部、西部)、やや少(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部と西部で平年よりも多く、東部で平年並であった。発生程度は西部で平年よりやや高く、東部、中央部では平年以下であった。
- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、ほとんどのほ場でタバコカスミカメ等の天敵が定着していることから、減少傾向で推移するものと考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

7) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多(県下全域)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生がみられた。いずれの地域も発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月第1半旬～第6半旬の誘殺数は、全地点で平年を上回っているが、例年、気温の低下とともに野外密度も低下

することから、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

3 促成ピーマン、シシトウの病害虫

1) うどんこ病

予 想 発生量：やや少(東部)、少(中央部、中西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は東部で平年よりもやや少なく、中央部、中西部で少なかった。発病程度はいずれの地域も平年より低かった。
- (2) 気温の低下にともない病勢の進展が緩慢となることから、発生が増加は少なく、現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 他の糸状菌病害とは異なり、やや乾燥条件で発病が多くなる。多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

2) 斑点病

予 想 発生量：多(中央部)、やや多(中西部)、平年並(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部で平年よりも多く、中西部でやや多く、東部で平年並であった。発病程度は中央部で平年よりも高く、東部、中西部では平年より低かった。
- (2) 低温期は加温機が稼働する時間が長くなるため、発生が増加は少なく、現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温によりハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

3) 黒枯病

予 想 発生量：多(中央部)、やや多(中西部)、少(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県中央部と中西部で発生が見られ、発生面積は中央部で平年よりも多く、中西部でやや多かった。発病程度は、中央部で平年よりも高く、中西部では低かった。
- (2) 低温期は加温機が稼働する時間が長くなるため、発生が増加は少なく、現在の発

生傾向が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温により、ハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

4) ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量：やや少(中央部、中西部)、少(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県中央部と西部で発生が見られ、発生面積は両地域とも平年並であった。発生程度は、中央部で平年よりもやや高く、中西部で平年並であった。
- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、ほとんどのほ場で天敵が定着していることから、減少傾向で推移するものと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるため、低密度時の防除を徹底する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

5) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多(中西部)、やや少(東部、中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中西部で平年よりも多く、東部、中央部で平年並であった。発生程度は、いずれの地域も平年以下であった。
- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、多くのほ場で天敵が定着していることから、減少傾向で推移するものと考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

6) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多(東部、中央部)、少(中西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県東部、中央部で発生がみられた。両地域とも平年と比べ発生面積は多く、発生程度も高かった。
- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月第1半旬～第6半旬の誘殺数は、全地点で平年を上回っているが、例年、気温の低下とともに野外密度も低下することから、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

4 促成トマトの病害虫

1) 黄化葉巻病

予 想 発生量：多(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 11月上中旬の気温が平年よりも高く推移したことから、野外からの媒介虫の飛び込みが例年よりも遅くまで続いたと考えられ、12月に入っても既感染株の発病が続くと予想される。

対 策

- (1) 媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。また、罹病株はほ場外に持ち出し、埋却するなどして処分する。

2) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 気温の低下にともない増殖が緩慢になることや、野外から施設内への侵入は少なくなることから、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。また、天敵の利用など、化学合成農薬以外の防除方法も取り入れる。

3) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月第1半旬～第6半旬の誘殺数は、全地点で平年を上回っているが、例年、気温の低下とともに野外密度も低下することから、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

農作物の病虫害防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病虫害防除所ホームページ(こうち農業ネット)<https://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

- ①病虫害発生予察月報、病虫害発生予察予報
- ②病虫害発生予察注意報、病虫害発生予察警報、病虫害発生予察特殊報
- ③病虫害発生予察技術資料
- ④新しく問題となっている病虫害 etc.

高知県農薬情報システム <https://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/kochi>

- ①農薬の検索
- ②農薬データの一覧
- ③配信ファイルの閲覧(農薬安全使用、病虫害防除指針 etc.)